

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-327291

(43) 公開日 平成9年(1997)12月22日

(51) Int.Cl. ⁶	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 1 2 N 15/09		9282-4B	C 1 2 N 15/00	A
C 0 7 H 1/08			C 0 7 H 1/08	
21/02			21/02	
C 1 2 Q 1/68		7823-4B	C 1 2 Q 1/68	A

審査請求 未請求 請求項の数11 O L (全 6 頁)

(21) 出願番号 特願平8-149128

(22) 出願日 平成8年(1996)6月11日

(71) 出願人 000003160

東洋紡績株式会社

大阪府大阪市北区堂島浜2丁目2番8号

(72) 発明者 石田 由和

福井県敦賀市東洋町10番24号 東洋紡績株式会社敦賀バイオ研究所内

(72) 発明者 池田 勝徳

福井県敦賀市東洋町10番24号 東洋紡績株式会社敦賀バイオ研究所内

(72) 発明者 上村 秀喜

福井県敦賀市東洋町10番24号 東洋紡績株式会社敦賀バイオ研究所内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 RNAの抽出精製方法

(57) 【要約】

【課題】 細胞等の生物材料からRNAを煩雑な操作を必要とすることなく、短時間かつ高純度でRNAを抽出し、精製する方法を提供する。

【解決手段】 下記工程(a)～(c)を含むことを特徴とするRNAの抽出精製方法および該方法に使用するRNAの抽出精製試薬キット。

(a) 細胞等の生物材料に、カオトロピック物質を含む溶解液、有機溶媒からなる抽出液、および核酸結合性■相担体を酸性条件、好ましくはpH3～6にて添加、混合あるいは接触させることにより、生物材料に含まれるRNAを■相上に吸着させ、(b) 上記(a)工程にてRNAを吸着させた■相担体を洗浄液により洗浄し、

(c) 上記(b)工程にて洗浄した■相から、溶出液によりRNAを溶出させる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 下記工程（a）～（c）を含むことを特徴とするRNAの抽出精製方法。

（a）細胞等の生物材料に、カオトロピック物質を含む溶解液、有機溶媒からなる抽出液、および核酸結合性■相担体を酸性条件下に添加、混合あるいは接触させることにより、生物材料に含まれるRNAを■相上に吸着させ、

（b）上記（a）工程にてRNAを吸着させた■相担体を洗浄液により洗浄し、

（c）上記（b）工程にて洗浄した■相から、溶出液によりRNAを溶出させる。

【請求項2】 酸性条件がpH3～6である請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項3】 カオトロピック物質を含む溶解液のpHが3～6である請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項4】 カオトロピック物質がグアニジンチオシアン酸塩である請求項1に記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項5】 有機溶媒が水飽和フェノールまたは緩衝液飽和フェノール、クロロホルム、またはこれらの組み合わせである請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項6】 核酸結合性■相担体がシリカを含む担体である請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項7】 核酸結合性■相担体が粒子である請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項8】 核酸結合性■相担体が超常磁性金属酸化物を含む粒子である請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項9】 抽出液が水あるいはTEバッファーである請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項10】 核酸結合性■相担体が超常磁性金属酸化物を含む担体であって、さらに、磁力を利用して核酸結合性■相担体と液相を分離する工程を含むことを特徴とする請求項1記載のRNAの抽出精製方法。

【請求項11】 カオトロピック物質を含む溶解液、pH3～6の緩衝液、有機溶媒からなる抽出液、核酸結合性■相担体、洗浄液および溶出液を含むRNAの抽出精製試薬キット。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は細胞等の生物材料から、核酸結合性■相担体を用いてRNAを簡便かつ純度よく抽出精製する方法ならびに該方法に用いるRNAを抽出精製するための試薬キットに関する。該試薬キットは自動核酸抽出装置にも応用しうる。

【0002】

【従来の技術】 核酸を含有する細胞等の生物材料からの核酸の抽出精製は、遺伝子工学や臨床診断の分野では重要なステップである。例えば、ある遺伝子について解析

しようとする場合、まず、その遺伝子を保持する細胞等の生物材料からDNAやRNAといった核酸を抽出することが必要である。また、細菌やウイルスといった感染体の検出のためのDNA/RNA診断においても、血液等の生物材料から細菌やウイルスの核酸を抽出した後、抽出することが必要である。一般に、生物材料に含まれるDNAやRNAといった核酸は、遊離した状態で存在するわけではなく、タンパク質、脂質、糖から構成される細胞膜や細胞壁等の殻の中に存在し、ほとんどの場合、核酸■身もタンパク質との複合体を形成している。したがって、生物材料から核酸を抽出精製する場合には、まず超音波や熱による物理的破碎処理やプロテアーゼによる酵素処理、界面活性剤や変性剤による処理等を施すことにより核酸を遊離させ、さらに、フェノール等の有機溶媒による抽出操作や超遠心分離、イオン交換体等の担体を使用したカラムクロマトグラフィー等により、破碎物中から核酸を精製する必要がある。これらの手法は、核酸や出発材料、さらには抽出した核酸の用途に応じて組み合わせられ、それぞれ最適化されて用いられている。

【0003】 細胞等の生物材料からRNAを抽出精製する方法としては、いわゆるAGPC法 [Analytical Biochemistry 162, 156-159 (1987)] が一般的によく用いられている。この方法は、（1）細胞等の生物材料にグアニジンチオシアン酸塩とフェノール、クロロホルムを含む溶液を順次、添加して細胞膜や細胞壁を破壊し、核酸に結合しているタンパク質を変性させ、さらにゲノムDNAを有機相へ分配させ、（2）遠心分離によりRNAが含まれる水相のみを分離し、（3）この水相にエタノール又はイソプロパノールを添加することによりRNAを不溶化させ（エタノール沈殿法又はイソプロパノール沈殿法）、（4）さらに遠心分離によってRNAのみを分離させることを利用した方法である。このAGPC法は、他の超遠心分離法を利用するRNA抽出精製法と比較して、短時間かつ簡便にRNAが得られるという長所がある。しかし、この方法には遠心分離や水相の分離という煩雑な操作や、エタノール沈殿法あるいはイソプロパノール沈殿法という長時間を要するステップが必要なため、特に臨床診断など多サンプルを迅速に解析する必要がある場合には、より簡便かつ短時間でRNAが抽出精製できる方法が要求される。

【0004】 一方、簡便な核酸抽出法としてシリカを核酸結合性■相担体として使用する方法がある [特開平2-289596号公報]。この方法は、細胞などの生物材料から核酸を一段階で抽出することが可能なおうえ、溶出液として水またはTEバッファーなど低濃度の緩衝液を使用するため、エタノール沈殿法などの脱塩、濃縮のための操作を経ることなく、抽出した核酸を直ちに後の解析に直接使用することができるという利点がある。しかし、この方法により細胞からRNAの抽出を試みた場合、ゲノムDNAもRNAと同様にシリカ担体へ吸着するため、

■収液中にはRNAのほかに多量のゲノムDNAが混入する。そのため、RNAのみを得るためには、さらに酵素処理や超遠心分離、カラムクロマトグラフィー等の精製操作をおこなうことが必須である。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明の■的は、従来から存在する技術の上記問題点を解決することであり、細胞等の生物材料からRNAを煩雑な操作を必要とすることなく、短時間かつ高純度でRNAを抽出し、精製する方法を提供することである。

【0006】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、上記課題を解決するために鋭意検討した結果、適当なpHを有する溶解液、有機溶媒、および核酸結合性■相担体により、生物材料からRNAを簡便に抽出精製し得ることを見出し、本発明に達した。

【0007】すなわち、本発明は、下記工程(a)～(c)を含むことを特徴とするRNAの抽出精製方法である。

(a)細胞等の生物材料に、カオトロピック物質を含む溶解液、有機溶媒からなる抽出液、および核酸結合性■相担体を酸性条件下に添加、混合あるいは接触させることにより、生物材料に含まれるRNAを■相上に吸着させ、(b)上記(a)工程にてRNAを吸着させた■相担体を洗浄液により洗浄し、(c)上記(b)工程にて洗浄した■相から、溶出液によりRNAを溶出させる。

【0008】本発明では、核酸結合性■相担体が超常磁性金属酸化物を含む粒子であって、さらに磁力を利用して核酸結合性■相担体と液相を分離する工程を含むことがある。

【0009】また、本発明はカオトロピック物質を含む溶解液、pH3～6の緩衝液、有機溶媒からなる抽出液、核酸結合性■相担体、洗浄液および溶出液を含むRNAの抽出精製試薬キットである。

【0010】

【発明の実施態様】本発明によるRNAの抽出精製方法は、(a)溶解・吸着工程、(b)洗浄工程、(c)溶出工程の3段階に大きく分けられる。

【0011】(a)溶解・吸着工程では、細胞等の生物材料に細胞溶解液、有機溶媒、核酸結合性■相担体を酸性条件下に添加、混合あるいは接触させることにより、生物材料を溶解し、生物材料に含まれるRNAを核酸結合性■相へ吸着させる。上記溶解液、有機溶媒、核酸結合性■相担体を細胞等の生物材料に、別々に添加しても、あるいは同時に添加しても良い。本発明においては、カオトロピック物質を含む溶解液、有機溶媒からなる抽出液、および核酸結合性■相担体を酸性条件下、好ましくはpH3～6、さらに好ましくはpH4付近にて添加、混合あるいは接触させることを特徴とする。

【0012】本発明において用いられる生物材料として

は、例えば組織や培養細胞、細菌培養物の他に、全血や血清、白血球等の血液成分、唾液、尿、精液等の体液が挙げられる。

【0013】本発明において使用するカオトロピック物質を含む溶解液には、緩衝剤を含有させることが好ましい。これは、予め溶解液に含まれていても、また、細胞を溶解した後に緩衝液として添加してもよい。この緩衝剤としては、一般に使用されるものであれば、特に限定されないが、pH3～6の範囲のいずれかのpHにおいて緩衝能を有するものがより好ましい。例えば、酢酸ナトリウム-酢酸、酢酸ナトリウム-塩酸等が挙げられ、その使用濃度としては1～500mM、pHは3～6の範囲が好適である。

【0014】本発明において用いられる溶解液には、カオトロピック物質が含まれる。このカオトロピック物質としては、一般にカオトロピック物質として知られているような、疎水性分子の水溶性を増加させる作用を有しており、さらにRNAの■相への結合に寄与するものであれば特に限定されない。具体的には、グアニジンチオシアン酸塩、グアニジン塩酸塩、よう化ナトリウム、よう化カリウム、過塩素酸ナトリウム等が挙げられる。これらのうち、RNAを分解するリボヌクレアーゼに対する阻害効果の大きいグアニジンチオシアン酸塩が好ましく用いられる。これらのカオトロピック物質の使用濃度は、用いられるカオトロピック物質により異なり、例えば、グアニジンチオシアン酸塩を使用する場合には、3～5.5Mの範囲となるように使用するのが好ましい。

【0015】また、カオトロピック物質を含む溶解液には、細胞膜の破壊あるいは細胞中に含まれるタンパク質を変性させる■的で、界面活性剤を含有させてもよい。この界面活性剤としては、一般に細胞等からの核酸抽出に使用されるものであれば、特に限定されないが、具体的には、ポリオキシエチレンオクチルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンソルビタンモノラウレート、ポリオキシエチレンソルビタンモノオレエート等の非イオン界面活性剤、ドデシルトリメチルアンモニウムブロミド、ドデシルトリメチルアンモニウムクロリド、セチルトリメチルアンモニウムブロミド等の陽イオン界面活性剤、ドデシル硫酸ナトリウム、N-ラウロイルサルコシンナトリウム、コール酸ナトリウム等の陰イオン界面活性剤、ホスファチジルエタノールアミン等の両性界面活性剤が挙げられる。これらのうち、N-ラウロイルサルコシンナトリウムが好ましく用いられる。これらの界面活性剤の使用濃度は、用いられる界面活性剤により異なり、例えば、N-ラウロイルサルコシンナトリウムを使用する場合には、0.1～2%の範囲となるように使用するのが好ましい。

【0016】本発明において用いられる有機溶媒としては、RNAの■相への結合を妨げるものでなく、かつDNAの■相への結合を妨げるものであれば、特に限定さ

れない。この原理についての詳細は不明であるが、有機溶媒を液相に添加することにより液相の極性を適度に下げ、そのことによって、分子表面の極性が異なるRNAとDNAに■相との結合の選択性を付与しているものとする。本発明において用いられる有機溶媒の具体例としては、水飽和フェノール、緩衝液飽和フェノール、クロロホルム、メタノール、エタノール、1-プロパノール、2-プロパノール、1-ブタノール、3-メチル-1-プロパノール、アセトン等が挙げられる。これらのうち、水飽和フェノールのみ、あるいは水飽和フェノールとクロロホルムを適当な割合で混合したものが好ましい。

【0017】本発明において用いられる核酸結合性■相担体としては、カオトロピックイオンの存在下で核酸を吸着、すなわち可逆的な結合により保持することができる親水性表面を有する担体であれば、特に限定されない。具体的には、二酸化ケイ素、すなわちシリカが好ましく用いられる。また、前記のような核酸との可逆的な結合を妨げるようなものでなければ、シリカから構成される他の物質、例えばガラス、ケイソウ土、あるいはこれらを化学的修飾により表面処理を施したものや、超常磁性金属酸化物等の他の物質との複合体も含まれる。また、この核酸結合性■相担体の形態としては、粒子、フィルター、反応容器等が具体的に挙げられるが特に限定されない。これらのうち、吸着と溶出の効率を考慮すると粒子の形態がより好ましく、このとき粒径は0.05～500μmがより好適である。

【0018】(b)洗浄工程は、上記(a)における生物材料、溶解液、有機溶媒、核酸結合性■相担体の混合物から、RNAが吸着した核酸結合性■相担体のみを可能な限り分離する工程である。このとき、洗浄液を使用して約1～3■程度、繰り返し洗浄するのが好ましい。

【0019】本発明における液相と■相との具体的な分離手段としては、使用する核酸結合性■相担体の形態により異なり、核酸結合性■相担体が粒子の形態である場合には、遠心分離、ろ過、カラム操作等が好ましい。さらには、粒子内に超常磁性金属酸化物を含ませておいたものを■相担体として使用すれば、磁石等を用いた簡便な磁気分離法が可能となり、より好適である。

【0020】本発明において用いられる洗浄液としては、■相担体からのプラスミドDNAの溶離を促進するものでなく、かつ、ゲノムDNAやタンパク質の■相への結合を妨げるものであれば特に限定されない。具体的には、3～5.5Mグアニジンチオシアン酸溶液あるいは40～100%エタノールが好ましく、これらの洗浄液を併用するとより好適である。つまり、まず、グアニジンチオシアン酸溶液で洗浄した後、さらに40～100%エタノールで洗浄するのが好ましい。また、初めに溶解・吸着工程にて使用した細胞溶解液および有機溶媒を洗浄液として使用すると、ゲノムDNAとタンパク質の除去により有効である。このとき、続いて40～10

0%エタノールで洗浄するのが好ましい。

【0021】(c)溶出工程は、上記(b)工程におけるRNAが吸着した核酸結合性■相担体から該RNAを溶離させる工程である。従って、本発明において用いられる溶出液としては、■相からのRNAの溶離を促進するものであれば、特に限定されない。具体的には、水あるいはTEバッファー[10mMトリス塩酸緩衝液、1mMEDTA、pH8.0]が好ましい。このとき■相に吸着したRNAは、透析やエタノール沈殿法等の脱塩、濃縮操作を施すことなく、逆転写酵素等を使用した酵素反応に直接使用することができる。

【0022】本発明によるRNAの抽出精製方法は、単純な工程から構成されるため、■相の分離操作や試薬分注操作を自動化した核酸抽出装置へ容易に応用しうる。

【0023】本発明のRNAの抽出精製試薬キットは、カオトロピック物質を含むpH3～6の溶解液、有機溶媒からなる抽出液、核酸結合性■相担体、洗浄液および溶出液を含む。

【0024】

【実施例】以下、実施例により本発明をさらに具体的に説明するが、本発明はこれらの実施例に限定されるものではない。

実施例1 HeLa細胞からのRNAの抽出精製

(1) HeLa細胞の調製

HeLa細胞を10%牛胎児血清(Gibco BRL社製)含有ダルベッコ変法イーグル培地(ニッスイ社製)培地15mlで37℃、4■間培養した。培養終了後、トリプシン処理により遊離した細胞を15ml容遠心分離管へ移し、1,000rpm、5分間遠心分離し、上清を除去した後、10mlのPBS[137mM塩化ナトリウム、2.7mM塩化カリウム、4.3mMリン酸水素二ナトリウム、1.4mMリン酸二水素カリウム(pH7.4)]にて懸濁した。これについて細胞数を計測したところ 7×10^7 個であった。これをチューブ当たりの細胞数が 1×10^6 個となるように1.5ml容マイクロチューブに分注し、3,000rpm、5分間遠心分離し、上清を除去することにより得られた細胞ペレットを抽出材料とした。

【0025】(2) RNAの抽出精製

上記(1)にて調製した細胞に500μlの細胞溶解液[4Mグアニジンチオシアン酸、25mMクエン酸ナトリウム(pH7.0)、0.5N-ラウロイルサルコシナトリウム、0.1M2-メルカプトエタノール]を加えて溶解させ、続いて50μlの2M酢酸ナトリウム-酢酸(pH4.0)、さらに500μlの水飽和フェノールを加え、激しく混合した。これに、40μlの0.5g/ml磁性シリカ粒子(粒径1～10μm、四三酸化鉄粒子30%含有、比表面積280m²/g、細孔容積0.025ml/g、表面細孔直径2～6nm:鈴木油脂社製)の懸濁液を添加し、室温で10分間混合した。次に、マイクロチューブを磁気スタンド(MPC-M:ダイナル社製)に設置して磁性シリカ粒子を

集め、上清を除去した。さらに、マイクロチューブを磁気スタンドから外し、1 mlの洗浄液〔5.3Mグアニジンチオシアン酸、52mMトリス-塩酸 (pH6.4) 〕を加えて十分に混合した後、同様に磁気スタンドに設置して上清を除去することにより、粒子を洗浄した。同様にして、1 mlの洗浄液にて再度、粒子を洗浄し、続いて1 mlの70%エタノールで2回、100%エタノールで1回粒子を洗浄した。上清を除去した後、マイクロチューブを55℃に設定したヒートブロック上に設置し、20分間放置することによりチューブ内のエタノールを蒸発除去し、粒子を乾燥させた。これに100 μlの滅菌水を添加し、室温で10分間混合した後、磁気スタンドに設置して磁性シリカ粒子を集め、上清を回収した。回収量はおよそ80 μlであった。

【0026】回収液のうち、10 μlをアガロースゲル電気泳動に供し、エチジウムブロミド染色後、写真撮影した結果を図1 (レーン1) に示す。図1 (レーン1) から明らかなように、本発明の方法により抽出されたRNAサンプル中には、ゲノムDNAの混入はほとんど認められず、本発明の方法によってRNAを純度よく抽出精製できることが確認できた。

【0027】(3) RT-PCRによるヒトトランスフェリンレセプターRNAの検出

上記(2)にて得られた回収液に対して、ヒトトランスフェリンレセプターRNAをターゲットにRT-PCRをおこなうことにより、回収液中のRNAの検出を試みた。RT-PCRは、市販の試薬キットRT-PCR high (東洋紡績社製) とヒトトランスフェリンレセプター増幅用プライマー (CL5407-1: Clontech社製) を使用して行った。まず、上記(2)にて得られた回収液のうち、10 μlにM-MLV逆転写酵素、逆転写用プライマーを含む逆転写用試薬を加え、最終液量を20 μlとし、これを42℃、20分間保温して逆転写反応をおこなった。また、並行して逆転写酵素を加えずに同様な操作をおこない、これを逆転写反応のネガティブコントロールとした。次に、逆転写後の反応液に耐熱性DNAポリメラーゼを含むPCR用試薬を加え、最終液量を100 μlとし、DNA Thermal Cycler (Perkin Elmer Cetus社製) にて95℃、1分間、56℃、1分間、72℃、1分間を30サイクル実施し、PCRをおこなった。反応液のうち、10 μlをアガロースゲル電気泳動に供し、エチジウムブロミド染色後、写真撮影した結果を図2に示す。図中、レーン1はランダムファージDNAのPstI消化物からなるサイズマーカー、レーン2は実施例1に示す方法により抽出精製されたRNAのRT-PCR増幅産物の泳動パターン、レーン3は逆転写反応のネガティブコントロールを使用したときのPCR増幅産物の泳動パターンを示す。図2から明らかなように、逆転写反応をおこなった反応液 (レーン2) のみに増幅産物が見られ、本発明の方法によりRNAの抽出が可能

で、直ちにRT-PCRによる解析に使用できることが確認できた。

【0028】**実施例2** C型肝炎ウイルス (HCV) RNAの抽出精製

(1) 1×10^7 コピー/mlのHCVが含まれている血清を陰性血清により希釈して $2 \times 10^5 \sim 2 \times 10^3$ コピー/mlの希釈系列をつくり、これらを抽出材料とした。各希釈系列の血清サンプル50 μl ($1 \times 10^4 \sim 1 \times 10^2$ コピー相当) を使用して、実施例1と同様な方法によりRNAの抽出をおこなった。

【0029】(2) RT-PCRによるHCV・RNAの検出

上記(1)にて得られた回収液に対して、HCV・RNAの非翻訳領域をターゲットにRT-PCRをおこなうことにより、回収液中のHCV・RNAの検出を試みた。RT-PCRは、市販の試薬キットRT-PCR high (東洋紡績社製) を使用しておこなった。まず、(1)にて得られた回収液のうち5 μlにM-MLV逆転写酵素、逆転写用プライマーを含む逆転写用試薬を加え、最終液量を20 μlとし、これを42℃、60分間保温して逆転写反応をおこなった。次に、逆転写後の反応液に耐熱性DNAポリメラーゼを含むPCR用試薬を加え、最終液量を25 μlとし、DNA Thermal Cycler (Perkin Elmer Cetus社製) にて、まず、94℃、30秒間、53℃、30秒間、72℃、1分間を38サイクル、さらにPCR用試薬を加え、最終液量を30 μlとし、94℃、30秒間、50℃、1分間、72℃、1分間を28サイクル実施することにより、二段階のPCRをおこなった。反応液のうち、10 μlをアガロースゲル電気泳動に供し、エチジウムブロミド染色後、写真撮影した結果を図3に示す。図中、レーン1は、ラムダファージDNAのPstI消化物からなるサイズマーカー、レーン2～7は実施例2に示す方法により抽出精製されたRNAのRT-PCR増幅産物の泳動パターンであり、レーン2及びレーン3は 1×10^4 コピー、レーン4及びレーン5は 1×10^3 コピー、レーン6及びレーン7は 1×10^2 コピー相当のHCVを含む血清サンプルを使用したときの結果を示す。図3から明らかなように、 1×10^4 コピーおよび 1×10^3 コピー相当のHCVを含む血清サンプルについて増幅産物が見られ、本発明の方法により血清サンプルからのHCV・RNAの抽出が可能で、直ちにRT-PCRによる解析に使用できることが確認できた。

【0030】**比較例1**

従来法と比較して純度よくRNAを抽出精製できることを確認するため、カオトロピック物質とシリカ粒子を利用した従来法によりRNAの抽出を試みた。

実施例1 (1) にて調製した細胞に、900 μlの細胞溶解液〔4.7Mグアニジンチオシアン酸、46mMトリス塩酸 (pH6.4) 、1.2%ポリオキシエチレンオクチルフェニル

エーテル、20mM EDTA]を加えて溶解させ、続いて40 μ lの0.5mg/ml磁性シリカ懸濁液を添加し、室温で10分間混合した。次に、マイクロチューブを磁気スタンドに設置して磁性シリカを集め、上清を除去した。次いで、実施例(2)の方法と同様にして、1mlの洗浄液[5.3Mグアニジンチオシアン酸、52mMトリス塩酸(pH6.4)]で2回、1mlの70%エタノールで2回、100%エタノールで1回粒子を洗浄した。上清を除去した後、マイクロチューブを55℃に設定したヒートブロック上に設置し、20分間放置することによりチューブ内のエタノールを蒸発除去し、粒子を乾燥させた。これに100 μ lの滅菌水を添加し、室温で10分間混合した後、磁気スタンドに設置して磁性シリカ粒子を集め、上清を回収した。回収量はおよそ80 μ lであった。回収液のうちの10 μ lをアガロースゲル電気泳動に供し、エチジウムブロミド染色後、写真撮影した結果を図1(レーン2)に示す。図1(レーン2)から明らかなように、比較例1に示した従来法より抽出されたサンプル中には、*

*ゲノムDNAが多量に混入することが確認された。

【0031】

【発明の効果】本発明によれば、適当な溶解液と核酸結合性材料を酸性条件下に使用することにより、生物材料に含まれるRNAを特異的に吸着させ、さらに適当な溶出液を使用することにより、煩雑な後処理操作を必要とすることなく該RNAを簡便に回収し、抽出精製できる。

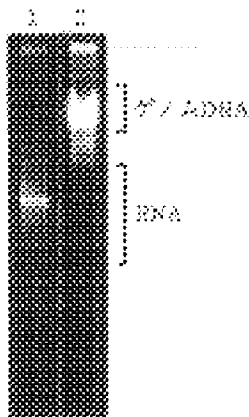
【面の簡単な説明】

10 【図1】本発明の方法と従来法により、培養細胞から抽出精製されたRNAのアガロースゲル電気泳動パターンを示す面に代える写真である。

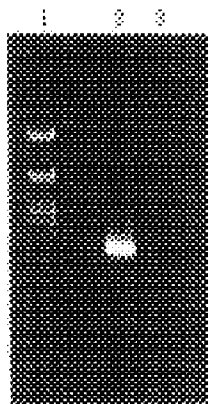
【図2】本発明の方法により、培養細胞から抽出精製されたRNAのRT-PCR増幅産物のアガロースゲル電気泳動パターンを示す面に代える写真である。

【図3】本発明の方法により、HCV陽性血清から抽出精製されたRNAのRT-PCR増幅産物のアガロースゲル電気泳動パターンを示す面に代える写真である。

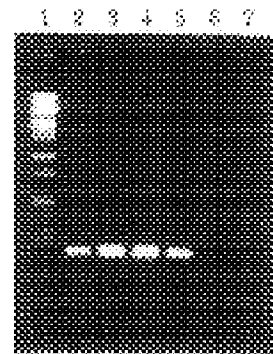
【図1】



【図2】



【図3】



フロントページの続き

(72)発明者 川上 文清

福井県敦賀市東洋町10番24号 東洋紡績株式会社敦賀バイオ研究所内

(72)発明者 川村 良久

福井県敦賀市東洋町10番24号 東洋紡績株式会社敦賀バイオ研究所内